
王妃の自己防衛力

行見 八雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王妃の自己防衛力

【Nコード】

N8224T

【作者名】

行見 八雲

【あらすじ】

短編小説『王妃の資格』の続きになります。

ある日突然異世界へやって来た主人公（女）が、王から王妃になつてほしいと言われ、前話に続き、再び考え直してほしいと言いつて行くのだが、今度も色んな人達の妨害にあつて……というお話です。

これは、地球とは異なる世界のお話。

うららかな日差しの中、可愛らしい蝶がふわふわと舞う、ある日のこと。

ここ、大国、アセスフィアの王城の王の執務室では、いつも通り長い黒髪を後頭部で纏め、シンプルなドレスに身を包んだ咲良が、群青色の髪の上に詰め寄っていた。

「陛下！ 今日こそ、私を王妃にするという考えを、改めて頂きます！」

咲良が両手を執務机の上に置き、そう王に詰め寄ると、王は、手にしていた書類を執務机に置いて、椅子に腰かけたまま、咲良を見上げた。

「だから、俺が王妃にしたいのはお前だけだと言っているだろう。誰が何を言おうが、改めるつもりはないぞ。大体、誰もがお前が王妃に相応しいと認めているのだから、問題は無かるぞ」

言っても聞かない子を宥めているかのような、少し困ったような顔で王に笑われて、咲良はむっと唇を噛んだ。

「それは、陛下が認めさせるために、あれやこれやをしたからでしょう！ この間まで反対していた貴族のおやじ共が、いきなりにこのこと祝いの言葉を言ってきて、そりゃーもう気持ち悪かったんですから！」

じゃなくて！ 私のような魔力も持たない者が、王妃になるなどと、反対する者もまだまだ多く　　」

そう、この世界では、誰もが魔力を有し、大なり小なり魔法を使っているのだが、異世界から来た咲良には、当然というか、魔力が無かったのだ。

そんな咲良が王妃になれば、いろいろ問題が出てくるだろうと、咲良は王を説得に来たのだが。

「さくらちゃん！！」

その時、ぱーんと盛大な音を立てて、執務室のドアが開かれた。

ドアの前に立っていたのは、背が高く筋骨隆々の、金髪碧眼の精悍な顔立ちの青年だった。

「ちょっと、さくらちゃん！ 陛下と結婚するんですって？ いや　　く　　ん！ 素敵ねえ！

ねね、お願い！ ドレス選びにはあたしも混ぜてね。さくらちゃんに似合う可愛いドレス、選んじゃうんだから！」

体をくねらせ、顔の横で組んだ両手を左右に振りながら、満面の笑顔で青年は咲良に言った。

この男性は咲良の直属の部下の一人で、名を、クアルテ・モダーナという。

普段は、逞しい体に女言葉という、少し変わった人物だが、一度戦場に立てば、その身の丈と同じ長さの大剣を振り回し、多くの敵兵を血の海へ沈めてきた猛者である。

彼が剣を一閃すれば、数十の兵がなぎ倒され、剣術でいうならば、

世界に並ぶ者はいないと言われるほどの使い手だ。

戦場で“大剣のクアルテ”の名が出れば、敵兵がこぞって逃げ出すほど、他国では恐れられている人物である。

「いや、クアルテ。私まだ結婚しないから」

咲良がクアルテを部屋から出そうと、背中をぐいぐい押ししながら、ため息混じりにそう言えば、

「ええ〜〜！ そんなこと言ったって、どうせ時間の問題でしょう？ さくらちゃんだって、本当は……………」

「わー！ わー！ わー！ わー！ わーー！！」

咲良は大声でクアルテの言葉を遮り、彼を扉の外へと押し出した。

「んもう！ でも、結婚するときには、絶対あたしにドレス選びをさせてよねー！」

だいぶ低い位置にある咲良を見下ろしながら、クアルテはバチンとウインクをして、鼻歌混じりに去って行った。

そんなクアルテの背中を見送りながら、咲良は執務室の扉を閉め、王の方へと向き直った。

「ええっと、どこまで話しましたっけ？」

ああ、もう、とにかく、私のような力の無い者が王妃になったら、さっさと暗殺されちゃって、国内に混乱が

「おう、さくらー！」

ノックも無しに執務室の扉が勢いよく開かれ、そこから、先ほどのクアルテよりも長身で、がっちりとした体つきの、黒髪金目の男が室内へずかずかと入ってきた。

「おめえ、この坊ちゃんとは結婚すんだってな。しっかし、大丈夫か？ お前のそのほっそい腰で、この坊ちゃんの×××を×××して、××××××できるのかよ？」

にやにやと笑いながら放送禁止用語を連発する男に、咲良は顔を真っ赤にして、

「こんのセクハラオヤジがああああ！！ 出てけえええええ！！」

男の尻に蹴りを食らわした。

この無精ひげを生やし、胸もとのだらしなく開いた軍服を着た、三十代後半に見える男 名を、クロラムフェニルヴァイトという は、実は、齡千年を超す、もはや伝説上でしか存在しないと言われた、黒竜が人の姿をとったものである。

絶対的な力と、豊富な知識を持ち、本来の竜体に戻れば、その身の丈は二百メートルにも及ぶ。そして、その姿で一つ羽ばたけば、周囲の村が一瞬で壊滅し、その口から吐き出される火炎の球は、一発で一つの都市を滅ぼし、後にはクレーターしか残らない、と言われるほどの威力を持つ。

太古には黒竜の一族が世界の半分を破壊して回った、という伝説もあり、今でも人々から恐れられる存在である。

「お〜〜いてえ」

と、ちつとも痛く無さそうに笑いながら、男は尻をさすりながら部屋を出て行った。

ふーふーと荒い息を吐きながら、赤い顔で男の背を睨みつけていた咲良は、男が扉の向こうに消えると、ばんつと勢いよく扉を閉め、王へ振り返った。

「ですから！ 私には、自ら身を守る力もありませんし、警備とか、みんなの負担に

「さくらさん！」

「さくら！」

「さくちゃん！」

どーんと盛大な音を立てて、執務室の扉が開かれた。

そして、そこから雪崩込むように、四人の人物が室内へ駆け込んできた。

「さ……さくらさん！ えと……結婚おめでとう……！ 僕……僕は、心から、……さくらさんの幸せを……うっ……祈ってるよ〜〜」

そう言いながら、ぼろぼろと涙を流す、ひよろりとした細い体に黒いマントを羽織った、黒髪赤目の男。彼は、純血でありながら、血が苦手な菜食主義者で泣き虫の吸血鬼、サフィール・メティス・

サルベリアテ・ヴラディスクアンモール。

「さくら！ こんな陰湿腹黒男と結婚すれば不幸になるだけだ！
こんな顔と権力だけの男、ぼくは認めないぞ！」

そう言っつて、咲良にずいといと詰め寄ったのは、銀色の髪に新緑の瞳の、天使のような美貌の少女、ユーレナ・リグ・レイダーである。自分をぼくと言ひ、男の子のような恰好をしているが、その可愛らしさは輝くほどで、古のエルフ王の血を引く、エルフと人間のハーフだ。

「わーい！ 結婚おめでとー！」

「お祝いだねー！」

「お祭りだねー！」

「わーい！ 楽しみだねー！」

そうはしゃぎながら、咲良の周りをぐるぐると回っているのは、水色の髪に濃い緑色の瞳の、チック・シシズ、そして、同じ水色の髪に濃い青色の瞳のタック・シシズの双子だ。

この双子、二人で魔法を発動する場合には、鬼才と言われるほどの能力を持つが、それぞれ単独では魔法を発動できないという、変わった性質の持ち主である。

「うつるさああああいー！」

そんな四人に囲まれながら、ずっと下を向いて肩を震わせながら黙っていた咲良が、いきなり両手を上へと突き上げ、大声で叫んだ。

「結婚なんて、しないって言ってるでしょ!!」

それに! ここは陛下の執務室なのよ! ばたばた騒がない!

ギツと、四人を睨みつけると。

「うわ〜ん! ごめんなさ〜い!!」

泣きながら、吸血鬼サフィールが慌てて駆け出して行き。

「ちよつと、さくら、ぼくは……………」

ハーフエルフのユーレナが気圧されたように後ずさり。

「わー! さくちゃんが、怒ったー!!」

と、きゃらきゃら笑いながら、双子が執務室の扉から飛び出して行く。

そんな四人を追いかけて、咲良は、王に退室の挨拶をすると、執務室を飛び出して行った。

「お前らー!! 教育し直した! そこへ並べええええ!!」

部屋の外から聞こえてくる、咲良の叫び声と、それに続く双子のきゃーっというはしゃぎ声。

「おいおい、どうしたさくら、あの日か?」

「セクハラああああ!!」

バシューンと何かを叩く音が、遠く聞こえてくる。

それらに、王は執務机に着いたまま、「賑やかだな」とくくつと楽しげに笑った。

「それで、お前は良いのか？」

王がちらりと、先ほど咲良が立っていた辺りに目をやると、いつの間にか、執事の格好をした、真っ白の髪にオレンジ色の目の、痩身の男が佇んでいた。

その男は、王の言葉ににこりと笑みを浮かべ。

「私は、我が君のお決めになったことに、逆らうつもりはございません」

その答えに、王が、「そうかよ」と鼻を鳴らすと、その男は笑みを奇妙に歪め、

「ですが、我が君を悲しませるようなことがあれば、誰であろうと容赦は致しません」

と、慇懃無礼に続けた。

この男の名は、モクレン。咲良がたまたま契約した、“禁忌の精霊”と言われる精霊であり、普段は咲良の影に潜んでいる。

この精霊は、戦闘・諜報・謀略・身の回りのお世話から夜の相手

まで、何でも完璧にこなす万能に近い能力を持っているのだが、それゆえに人を狂わせ、欲望に溺れさせるといふことから、“禁忌”として、人々から忌避されてきたのだ。

それでは、と頭を下げて、モクレンは主である咲良を追うために、部屋から出て行った。

少し傾いている扉を見ながら、王は焦がれるように、口元を緩めて笑い。

「お前を傷つけることが出来る者など、どこにもおるまいよ」

(後書き)

咲良が一番騒いでいるような気がする、というのはスルーの方向で。

『王妃の資格』の続きです。

頂いたコメントが嬉しかったもので、調子に乗って書いてしまいました。

しかし、期待外れでしたらすみません。主人公の仲間達のことを書いて、楽しかったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8224t/>

王妃の自己防衛力

2011年6月5日19時02分発行